

第5章 仮設住宅入居者調査8年間の推移および2018調査の概要

麦倉 哲（岩手大学）

1 世帯の特性と変化

（1）世帯構成

岩手県における太平洋沿岸被災地の世帯は、子育て世帯の転出や高齢化という傾向が見いだせると、一般に指摘された。子育て世帯には特有の生活課題があり、また高齢世帯にも特有の生活課題がある。こうした世帯が直面する諸問題を明らかにするために、この両世帯の推移に着目した。

世帯の類型を、「高齢世帯」「子ども世帯」「それ以外」の3分類にする質問は、2013年調査から採用したものである。2017年までの推移をみると、高齢世帯が徐々に増加し、2017年調査では半数に及んでいる（51.4%）。その一方で、「子ども世帯」（12歳以下の子どもがいる世帯）は徐々に減少していった。

子どもを養育しながら被災地で居住を継続することが徐々に難しくなってきた。他方で、それと裏腹のように、住民の高齢化が進み、高齢世帯の比率は高まっていた。

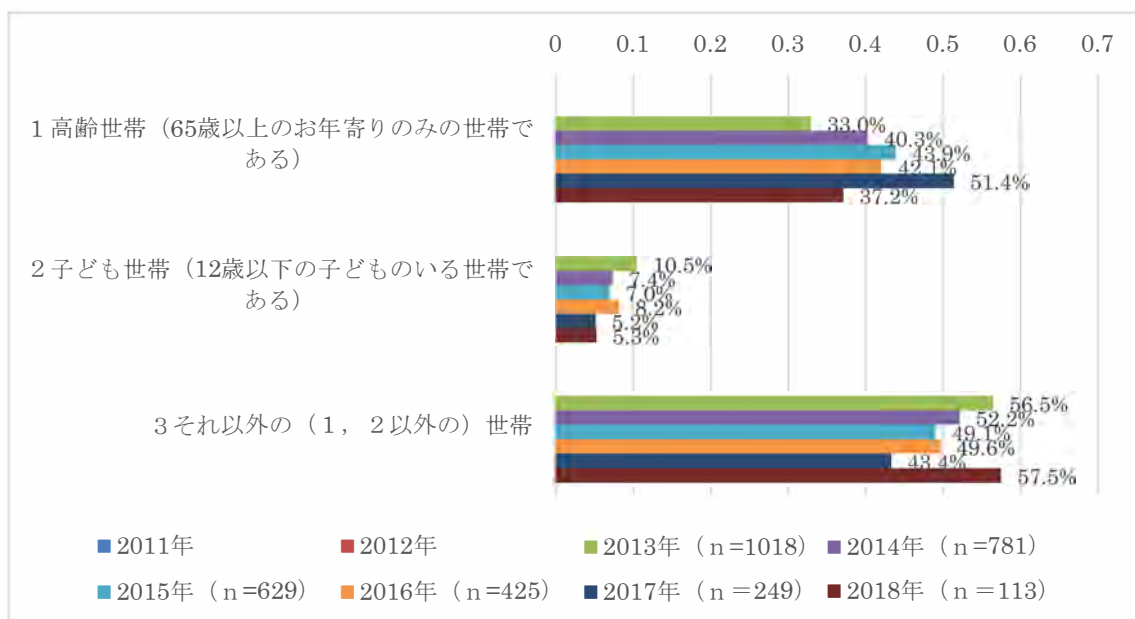


図1 世帯構成の推移

（2）世帯人数

同居世帯の人数は徐々に減っていった。仮設住宅の間取りは、せいぜい3人までなので、それ以上の人数の家族は、住宅を分割しなければならなくなった。3人家族が2Kの間取りで暮らすというのもかなり窮屈で、被災の結果、例えば父親と義母と高校生の娘がいる世帯では、父親は台所で寝るしかなかった。

大都市と比べれば、三世帯世帯やきょうだい人数が少ないといった家族の様相を維持している地方社会において、少人数で暮らすように仕向けられた仮設住宅は、いかにも不向きである。しかしながら、被災から復興へといった社会、経済上の諸般の事情も手伝って、世帯人数は徐々に減少していった。ここにも、都市的生活様式へと囲い込む傾向のある、復興政策の特徴がうかがえる。

「1人」世帯及び「2人」世帯が徐々に増え、3人以上の世帯の割合は徐々に減少していった。子育て層の他出と、入居者の高齢化、そしてそれら全体の特徴を示す、都市的生活様式、核家族化といった傾向が如実にうかがえる傾向となった。

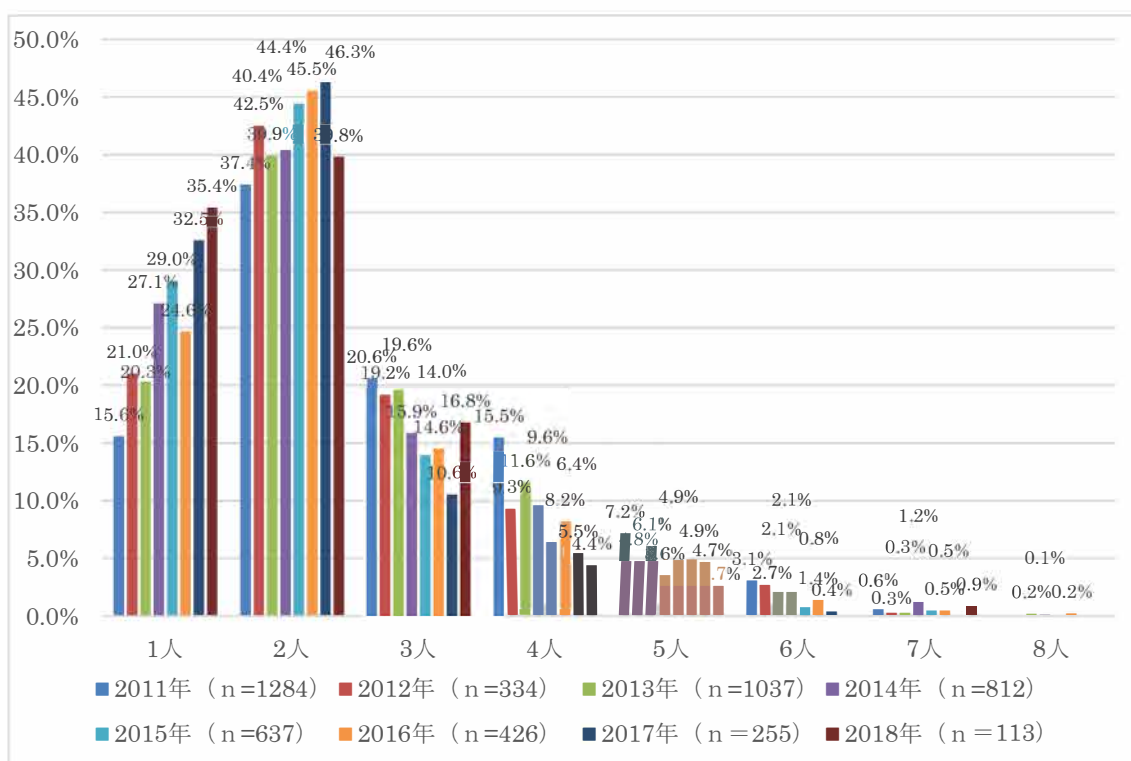


図2 世帯人数の推移

(3) 世帯の変化

各調査年において、過去1年間の世帯の変化をうかがった。このうち2017年のデータは、過去6年間の通算の経験をうかがったものである。このため、2017年の数値を除外してみると、毎年8割半ばの人は、自分も含めた世帯構成員の「転出」「転入」「入院」などの経験をしていない。このうち「転出」と「転入」の差異に注目すると、転出がおおむね3～5%台であるのに対して、転入は1～2%程度である。転出と転入を比べると、転出超過の傾向(転出>転入)が明瞭で、町の人口が徐々に減少していく傾向が裏付けられる。

2017年調査では、被災後に仮設住宅に入ってから6年間の経験をうかがった。調査結果からは、「転出」「逝去」「施設への入所、入院」が上位を占めていることから、人口減少

の様子がわかる。1年ごとでは、「出生」と「逝去」の経験比率に大きな差異がみられなかったものの、6年間の通算の経験でみると「逝去」の経験が8.6%となり、約1割に及んでいることがわかった。このことから、人口減少の趨勢がうかがえる結果となっている。

被災地の世帯人数は、転出のみならず、施設や病院への入院・入所、さらには逝去によって減少していく。長い仮設住宅での生活を送ってきた被災者たちは、大津波で家族を亡くす経験をし、また仮設住宅の暮らしの中で家族をみとるという経験をしているのである。こうしたことから、家族をみとるに十分な質の仮設住宅であることが望まれるのである。

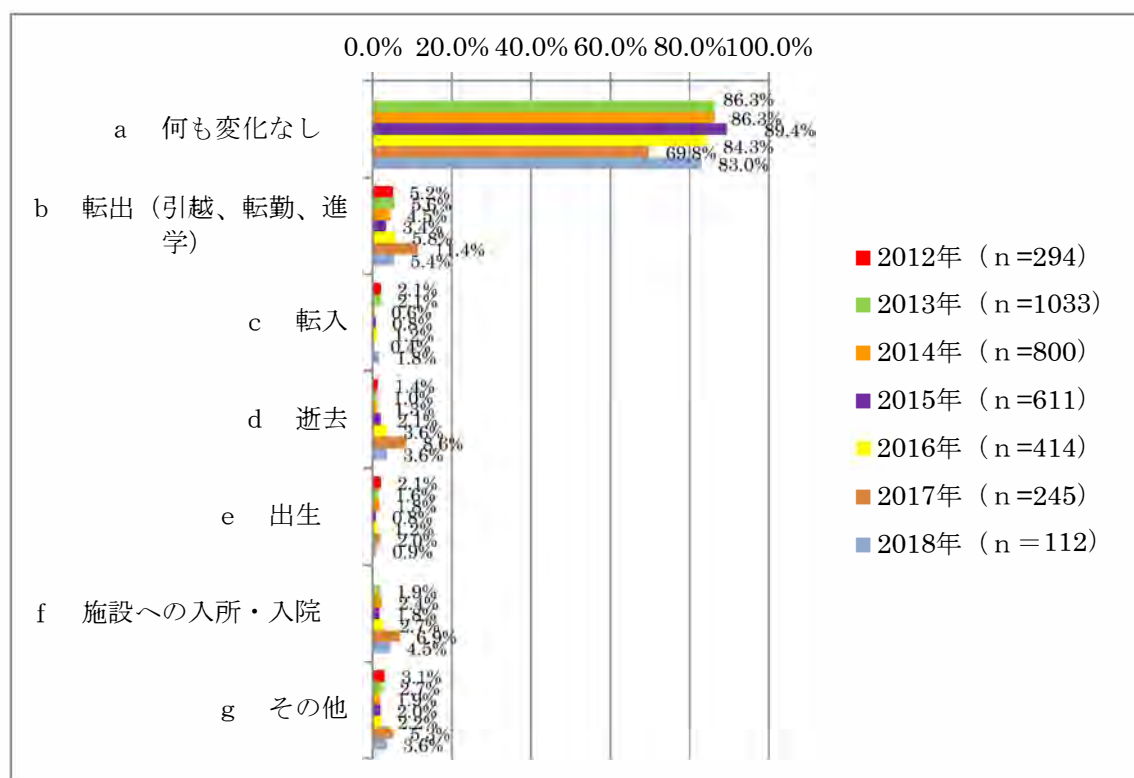


図3 世帯変化

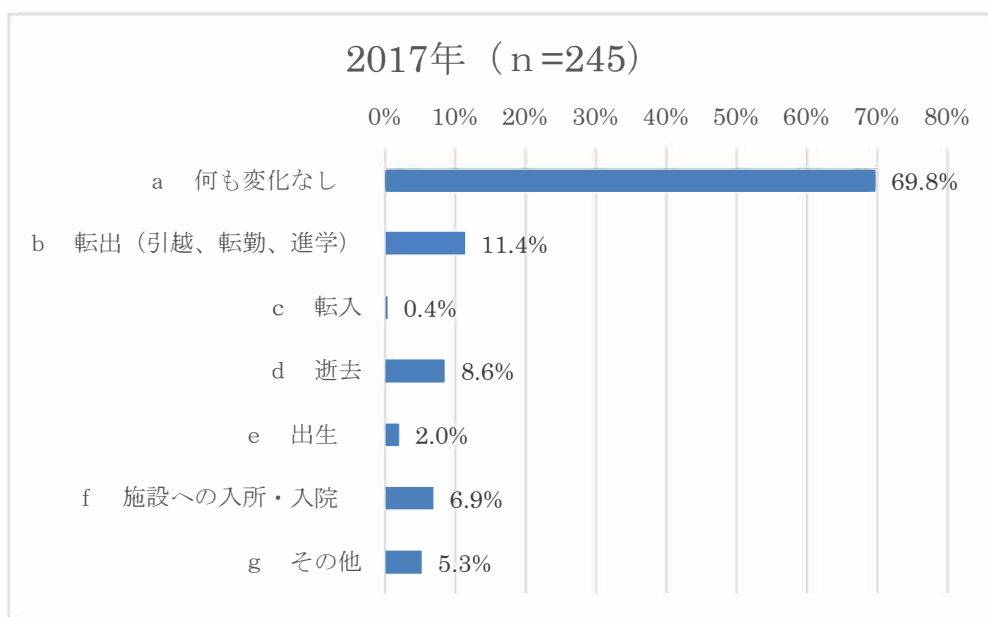


図4 世帯の変化

2 住宅で気になること

(1) 住宅の問題点

この調査の初回となる 2011 年 9 月の調査では、①仮設住宅が狭いこと、②収納するスペースがないこと、③結露がはなはだしいこと、そしてその結果カビが多発すること、また④お風呂の追い焚き機能がなく家族全員が入る前にお湯が冷めてしまうことなどが多々指摘された。つまり、北国で起きた災害に対して、供給された仮設住宅が北国使用ではなかったのである。

こうした仮設の点は各方面から指摘され、また本調査でも明らかとなったために、仮設住宅の①収納を高めるための改善や、②追い焚き機能の追加工事などがなされた。

住戸の外に後付けで別途物置が付いたり、追い焚き機能を追加するためのプロパンガスの配管場所などが工事されたりしたために、長屋型の仮設住宅の一部の外壁がむき出しになるなど、外観の見栄えが損なわれるなどの影響も起きた。

しかしながら、結露が激しく生じる影響はさして改善されることはなかったもので、仮設住宅の立地にもよるが、住民はカビ問題に悩まされることが続き、そのため住民のなかには除湿器を一日中作動させるなどの対応をとるケースもみられた。また、発生したカビにより健康を害するなどの影響があった。

元々が田んぼであったところに立てた仮設住宅は、しばしば湿気を伴い、また地盤が軟弱で床や建物そのものがゆがむ例もあった。扉の立て付けはしばしば歪むことがあった。また、山林やがけ地に近いところに建設された仮設住宅では、津波とはちがった他の災害、土砂災害の危険に直面したり、浸水害・洪水害の被害を受けたりするエリアも出てきた。

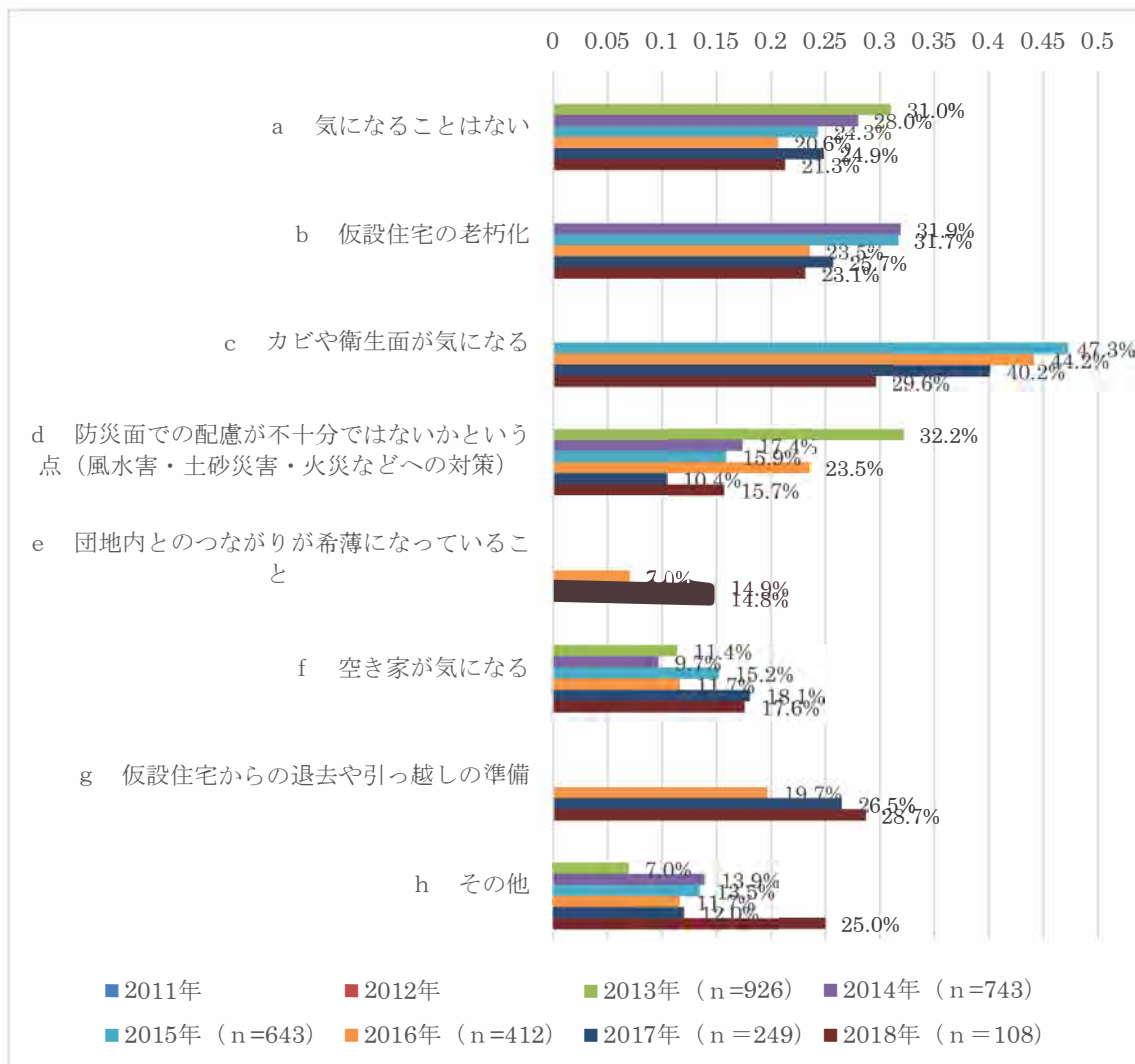


図5 住宅で気になること

2013年の大雨では、小槌地区の仮設住宅の後背地でがけ崩れが起き、2016年の8月には台風10号の影響があり仮設住宅の冠水がみられ、浸水の被害が発生した大槌地区・小槌地区の仮設団地では、他の団地への転居を余儀なくされた。岩泉町の被害状況は全国で注目され、これ以降、大雨洪水の危険がある場合、基礎的自治体は、積極的に避難勧告や避難指示を出す傾向がみられ、大槌町でもたびたび、避難勧告・避難指示が出されることとなった。

2019年には、仮設住宅が突風で飛ばされ転倒するという被害が発生した。飛ばされた仮設住宅は住民が退去後の住宅であったため、住民に具体的な被害はなかったものの、災害の多様性と深刻化の中を、復興途上の被災住民は生活しているのである。

かくして、2018年の段階の仮設住宅では、①地域コミュニティの低下、②新たな災害への危惧、③住宅の痛み、不具合、④次のステップへの歩み、苦難、⑤その他、環境の問題

などがみられた。

①住民の退去が進み、地域社会のコミュニティ機能が低下し、いざという時に頼りになるという意味での近隣関係による助け合い的な機能が低下し、人がまばらであることから寂しさが増している状態へと移行していくこととなった。

②また、とりわけ 2016 年の台風以降、たびたび風水害が発生し、他にも土砂災害の危険、突風などの危惧もあり、災害への不安が高まってきたといえる。空き家に目的外使用の住民が増えてきたことで、地元以外の人に住むことによる不安も高まることにもつながった。

③長年の使用により住宅の痛みもはげしくなった。役場は、修繕への円滑な対応をとったと思えるものの、回答結果では、老朽化や各種の不具合も多々指摘された。

④災害や、仮設住宅集約の影響で、仮設住宅間の転居を余儀なくされた人もいて、引っ越しの負担を訴える人もみられた。

（２）自由回答の結果から

①地域コミュニティの低下について

「空き家が多くなり住人が非常に少なくなった。」「目的外使用の人や他の人入ってきてコミュニケーションない。」「まわりに人がいなくなってきた。」「不審者が出没。防犯面が心配。」「仮設住宅に住民が減りさみしい。夜が暗い、怖い。元々いた人はいなくなり、今はほとんど派遣や支援の人。」

②新たな災害への危惧

「去年 2 回洪水警報で避難した。」「土砂災害への対策（を進めてほしい）。」「風水害（が心配）。」「川の氾濫が心配。」

③住宅の痛み、不具合

「雨漏りがあり修理してもらった。小アリもいっぱい入ってくる。ダニとカビのアレルギーで腎臓機能が低下し入院した（2 週間）。」「エアコン汚れ（が目立つ）。」「床が一部凹んでいる。」「風がふくとひさしや窓がゆれる。町には修理を要望している。」「自分は大丈夫だが通ってくる人の泊まる場所がない人もいる。」「住宅の老朽化で床板が沈む、トイレ窓の下のカビ（がたいへん）。」「トイレ、ドブくさい、下水のにおい（が気になる）。」「住宅の老朽化。アコーディオンカーテンが壊れた。天井のすき間。」「アカカビ。」「結露で布団がだめになった。」「窓の老朽化、水滴（窓・サッシ）。」「暑い、寒い。」

④次のステップへの歩み、苦難

「引っ越しが大変だった。」

⑤その他、環境問題

「雑草（蛇も出現）、雪の多さ、交通の不便さ、冬は坂が登れない。」「湿気（の問題がある）、山から動物が降りてくる。」「虫。」「雪が降って積もった時、駐車場から車を出せなかった。役場に相談するも対応なし。」

自由回答からは、数々の苦情が訴えられている。その一方で「慣れた」「住めば都」などと住む工夫をして住んできた人の回答もみられた。

目的外で、支援者、業者が住む理由もあるが、こうした方がたが、被災者の仮設住宅住民と交流できるような、住民に安心感を与えるような、入居過程の引き合わせや工夫が必要ではなかったかと思われる。

筆者は、2016 年の調査後に、回答票に記載された SOS の訴えにより、調査回答者を訪ね

苦境を訴える住民の話に耳を傾けた。一通り話をうかがうと落ち着きを取り戻した。聞いてくれる人、いざとなったら頼れる人を必要としていたようだ。

同じ 2016 年調査のさいに、台風 10 号の影響で河川氾濫が起これかねないとの訴えが岩手大学の当研究室に寄せられた。仮設住宅付近の川にかかる橋に、台風で流された流木がつかえたままで、現状では氾濫はしていないが、次の大雨で大きな被害が予測されるというものであった。この住民が直接訴えても、行政に切実さが伝わらないという訴えであった。この住民によると、近隣で虐待のような事案、一家心中未遂、派遣職員によるタバコの投げ捨てや、やはり派遣職員がクモの発生に驚いて大騒ぎするなど、多難な事件が頻発したのであった。

岩手県行政はその当時、岩泉町や宮古市などの甚大な被害が発生した箇所への対応に追われていたように思える。そこで、大槌町住民が指摘したリスク状態を県の担当者に伝え、しばらくして流木を撤去するなどの対応をしていただいた。

3 仮設住宅への訪問

(1) 訪問数の推移

過去 1 か月間の訪問者について聞いた質問について 8 年間の推移をみると、まず、この 1 か月間に「訪ねてきた人はいない」の比率が徐々に高まっている。特に 2018 年調査では、約 2 割 (19.6%) に達した。

訪問者でいちばん多いのは「家族・親族」、次いで「友人・知人」である。この両者が高いのは相変わらずであるが、両方ともその比率が徐々に減少している。全体として、訪問者が減る傾向がうかがえる。

他方で、「役場の事務的な訪問」「心身面の相談員」「生活面の相談員」の比率も徐々に低下する傾向にあったものの、被災から 5 年、6 年、7 年には幾分高まっている。行政の各担当部局が、訪問の対象を絞って訪問を継続している傾向がうかがえる。7 年目に「事務的な訪問」が高まったのは、仮設住宅退去後の住宅再建の意向調査や住宅復興などの相談の機会が増大したことによると思われる。社会福祉協議会の生活支援相談員等の訪問が継続している様子もこの結果からうかがえる。

「元の地区の人」「避難所で親しくしていた人」などは、被災からの時間の経過とともに徐々に減少していったものの、変わって「仮設で親しい人」の比率が高まる傾向がうかが

えた。しかしながらこうした傾向も、被災から6、7年目となると、仮設からの退去・自立も目立ってくることとなり、仮設コミュニティの期間限定性のはかなさをうかがわせる結果となった。「ボランティアの人」も、被災から2、3年と経つうちに減少の傾向がみられたが、5、6年目に改めて上昇する傾向もうかがえた。仮設住宅への生活の長期化に着目して改めて訪問活動等を活性化させていく傾向がみられたのである。被災後間もないころの支援ボランティアと、5、6年後における訪問、傾聴、寄り添い的なボランティアでは、端的に言って質を異にする。被災経験が長期化し、仮設住宅での生活の長くなる中で、ボランティアの支援も、そのステージが変わってきたといえるのではなかろうか。

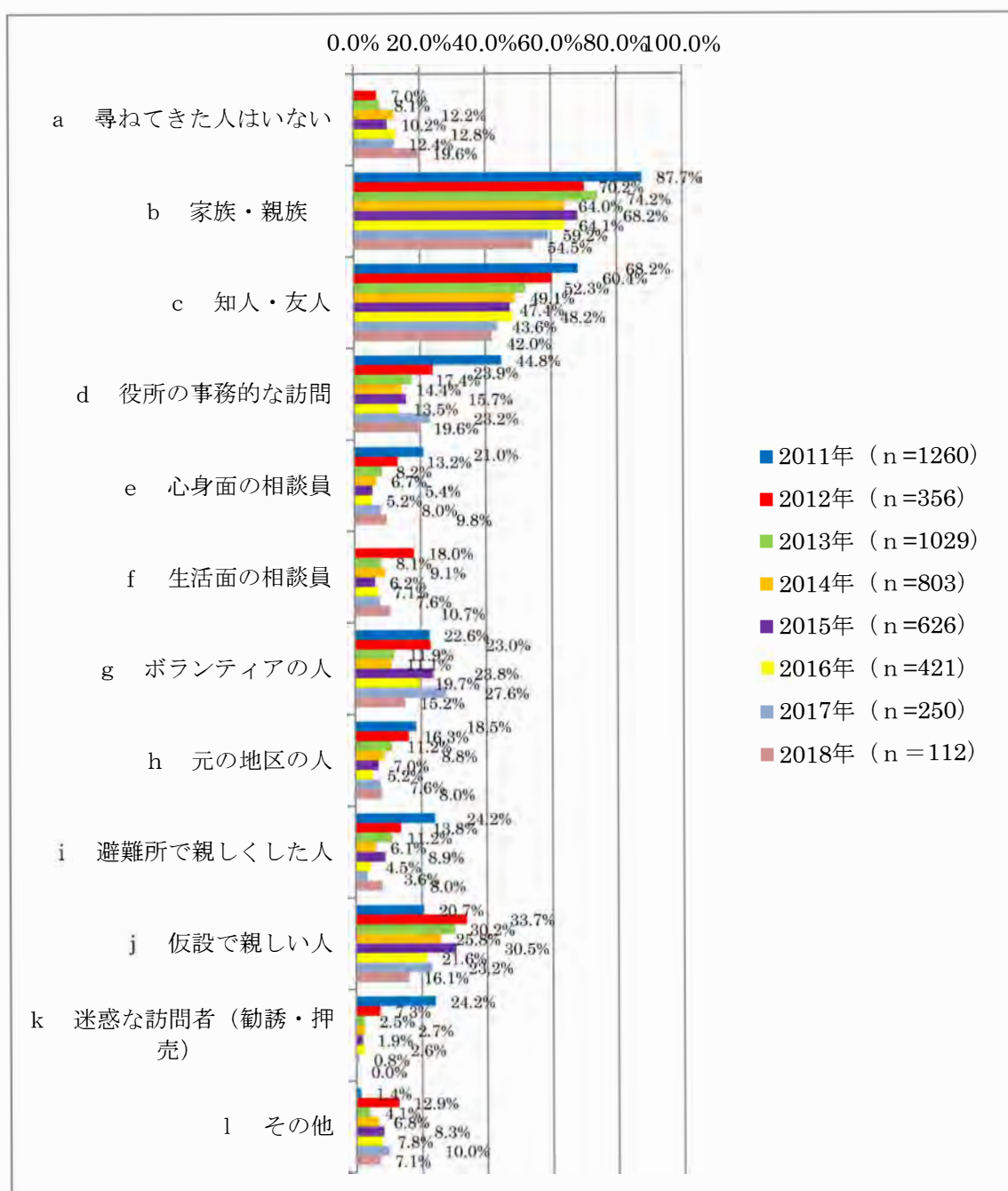


図6 仮設への訪問者

(2) 自由回答から

自由回答からは、①住宅の制約で交流が難しい、②仮設でできたコミュニティについて、③コミュニティの危機について、④訪問者との交流について、⑤これから先のことなどについての回答がみられた。

① 住宅の制約で交流が難しい

「狭いので、人を呼びたいが呼べない。」「震災後、7年5ヶ月まだ仮設住宅に居る。岩手県、大槌町の自治体考えが甘い。震災前の自宅に戻りたい。現在の仮設→気が大変めいる。

右も左も山、山、山。生活費がない為 1 日 1 食。」「山が近いので、ヘビが出る。相談して寄ってこないようにしてもらった。」

② 仮設でできたコミュニティについて

「仮設は嫌だなと思っていたが 7 年間もいたので近所付き合いができた。これがまた新しいところへ移るので近所関係に不安もある。」「息子夫婦も同じ団地に住んでいる。息子は、船の事故でなくなった夫の仕事を継いでいる。」

③ コミュニティの危機について

「大声で騒ぐ人がある。何が起こるかわからないので、不安。社協の人達は知ってはいる。」「買い物が不便である。周りがいなく話し相手がいない。」「引越した人も多く談話室へ来る人も少なくなった。」「日中母 1 人仮設にいるが話し相手も少なくボケが進んだような気がする。」「隣に人がいるのかすらわからない。」「子供がブラック企業でボロボロ。」「もう少し長くいさせて欲しい。」

④ 訪問者との交流

「ボランティア、母親の見守りのために訪問してくれる。」「その他、麦倉先生（がくる）。」

④ これから先

「新町営住宅に入って新しい生活になりますが近所の方々がどんな方なのか心配があります。」「（住宅自立とみなされ）最初は仮設に入れなかったり、公営に申し込みなかったりで手続が大変だった。」「仮設が続くはずであったが取り壊しが決定し、3 月までに移れなかったならば小鎚に移らなければならない。」「退去を迫られている。」「3 か月前に引っ越してきた。建築材の高騰を感じる。」「（校庭の仮設住宅を容認する校長転勤した結果）仮設から出ていかなければならない。」

4 心の平穏

心の平穏については、2012 年から設けた質問である。「平穏になりつつある」は、被災から時間がたつにつれて、返って減少していった。しかしながら、被災から 5、6 年がたと幾分上昇する傾向が出てきた。一方、「かえってきびしい」とする回答は、大きな変化を示すことなく、常に 3 割弱程度である。「ほとんど変わらない」の比率は被災から 5、6 年ごろに増加し、多くの被災者は変わらない現実を生きてる様子がかがえたが、その後は徐々に減少し、変わって「その他」の比率が幾分高まっている。

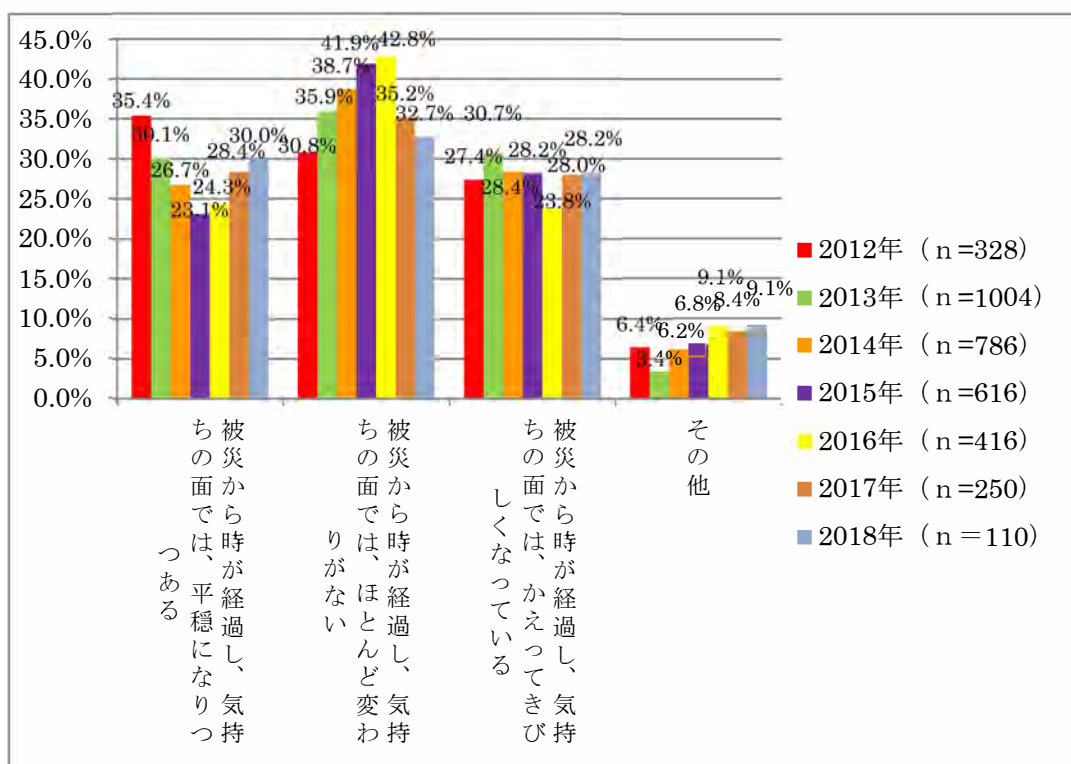


図7 心の平穩

5 WHO-5：精神の健康

WHO-5の質問は、最近2週間の状態について、5～0の6段階で回答を求めるものである。各項目が5点満点で5項目の合計の最高は25点である。この合計点が13点未満、つまり12点以下である場合は、精神の健康状態において問題がみられるとするのである。

この調査項目は、2013年調査から導入した。2013年からの推移についてみていきたい。

表1 WHO-5の調査項目

(5・4・3・2・1・0のどれか1つに○を)

5つの項目	いつも	ほとんどいつも	半分以上の期間を	半分以下の期間を	ほんのたまに	まったくない
A 明るく、楽しい気分でも過ごした。	5	4	3	2	1	0
B 落ち着いた、リラックスした気分でも過ごした。	5	4	3	2	1	0
C 意欲的で、活動的に過ごした。	5	4	3	2	1	0
D ぐっすりと休め、気持ちよくめざめた。	5	4	3	2	1	0
E 日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった。	5	4	3	2	1	0

(1) A 明るく、楽しい気分で過ごした。

まずA「明るく、楽しい気分で過ごした」という問いに対して、一番多いのは「半分以上の期間を」であるが、最もポジティブな「いつも」と回答した比率が徐々に高まっている。しかしながら、その真逆の「まったくない」も2018年には増加傾向にあるといえる。片や精神的な活力が増し、片やそれが減退している。この項目の結果からは、両極化の傾向がみられる。2点以下の人が、半数近くに及んでいる。

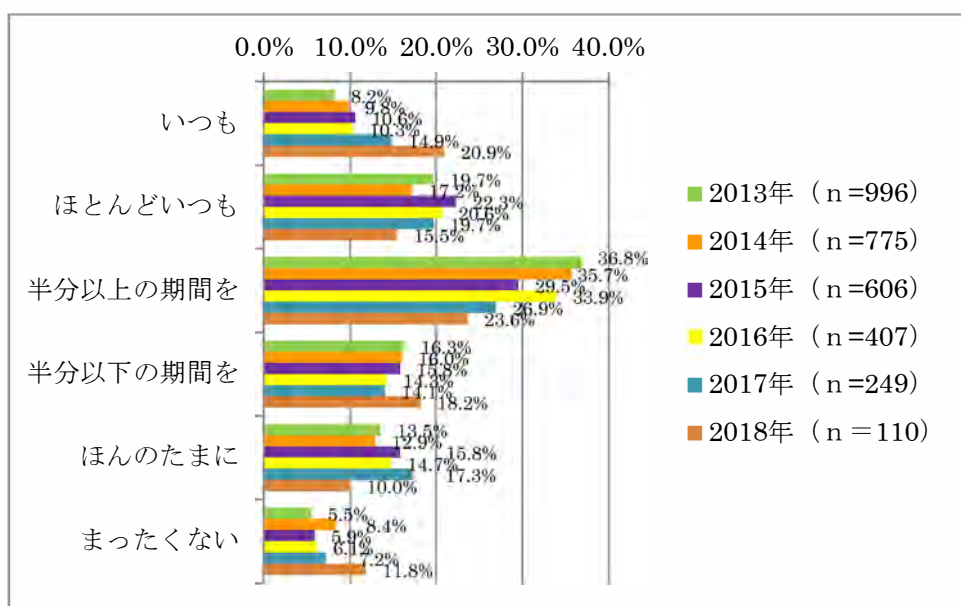


図8 A「明るく、楽しい気分で過ごした」

(2) B 落ち着いた、リラックスした気分で過ごした。

B「落ち着いた、リラックスした気分で過ごした」について、A項目と同様に、両極化の傾向がみられる。「いつも」と答える人が25.5%と伸びる一方で、点数が2点以下（「半分以下の期間を」以下）は4割を上回っている。

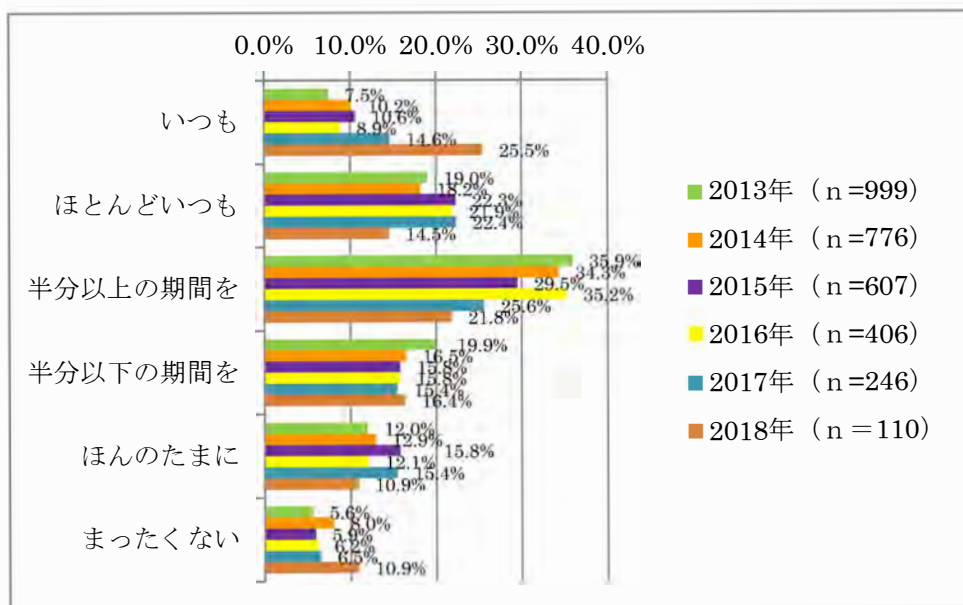


図9 B「落ち着いた、リラックスした気分で過ごした」

(3) C 意欲的で、活動的に過ごした。

C「意欲的で、活動的に過ごした」でも同様の傾向がみられる。「いつも」と答える人が2割を占める一方で、「半分以下の期間を」の選択肢以下の人の比率の合計は、約4割を占めている。

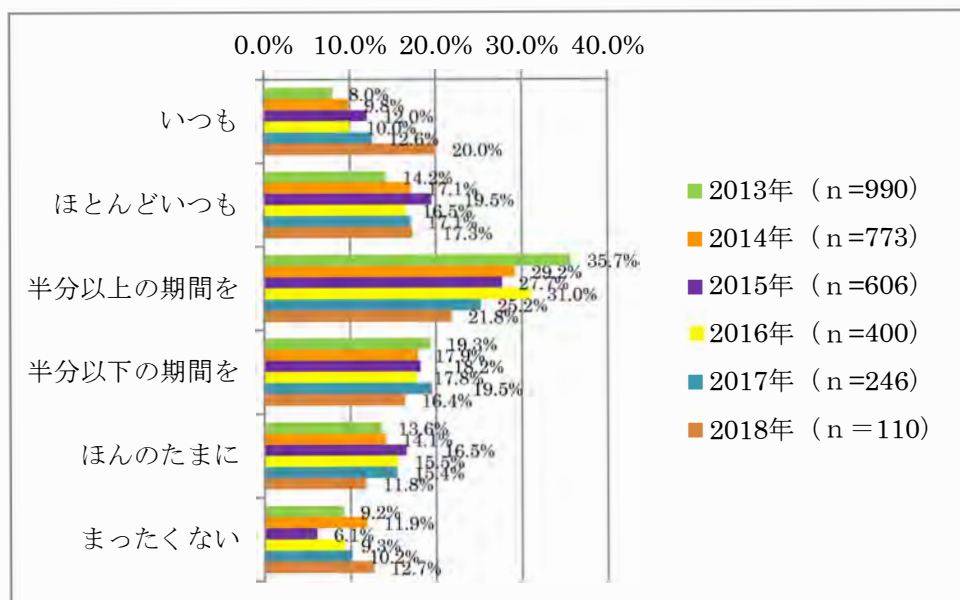


図10 C「意欲的で、活動的に過ごした」

(4) D 「ぐっすりと休め、気持ちよくめざめた。」

D「ぐっすりと休め、気持ちよくめざめた」では、「いつも」との回答が、第一となっている。総じて、睡眠状態は改善している様子がみられるが、その一方で、4割くらいの方は、2点以下で、「ぐっすりと休め」るのが、半分以下であるということである。

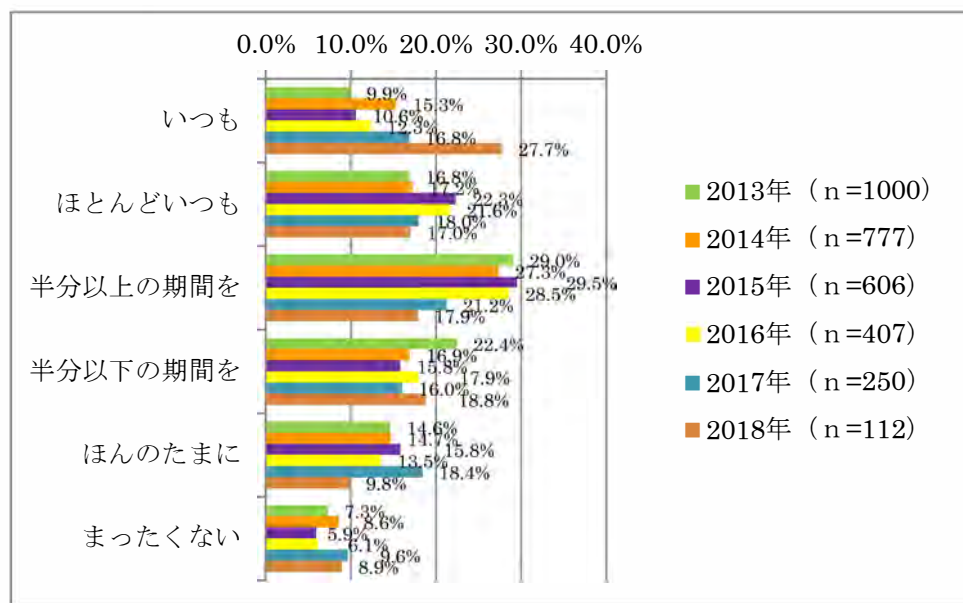


図 11 D「ぐっすりと休め、気持ちよくめざめた」

(5) E 「日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった」

E「日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった」について、「いつも」と答えた人が増えている。しかし、全体でみると、半分以下とする人が45%以上を占めている。

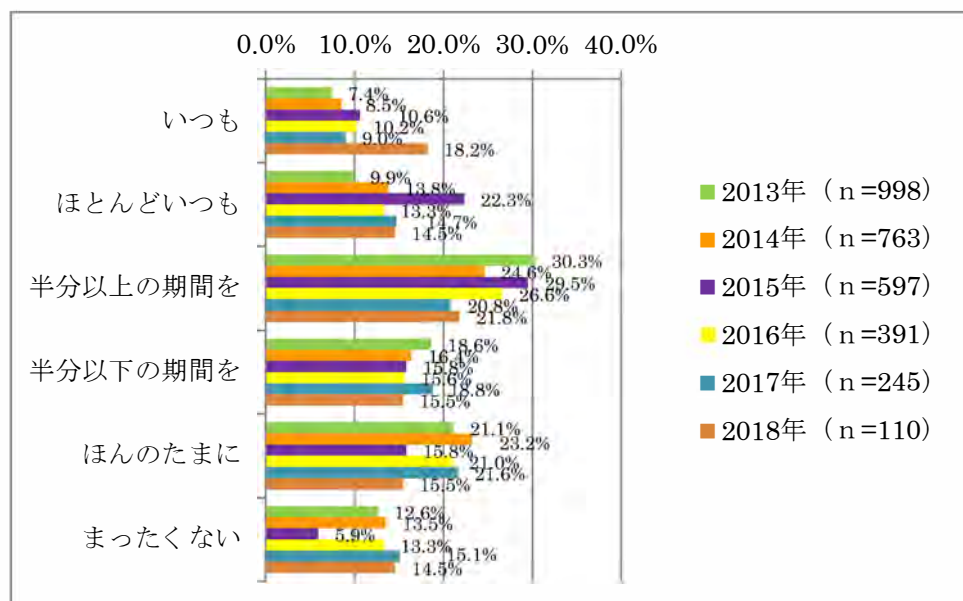


図 12 E「日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった」

(6) WHO-5の5項目を合計した数値

WHO-5の5項目を合計した数値が13点を超える人は約6割で、その一方で12点以下の人は約4割を占める。この数値の割合は、大きな変化を示していない。被災直後の時点から一貫して、精神の健康において問題を抱えている人の割合は4割であるということである。しかし、もう少し細かく見ると、最近では4割を少し下回る傾向もみられ、わずかながらに、改善の傾向が少し出ているともうかがえる。

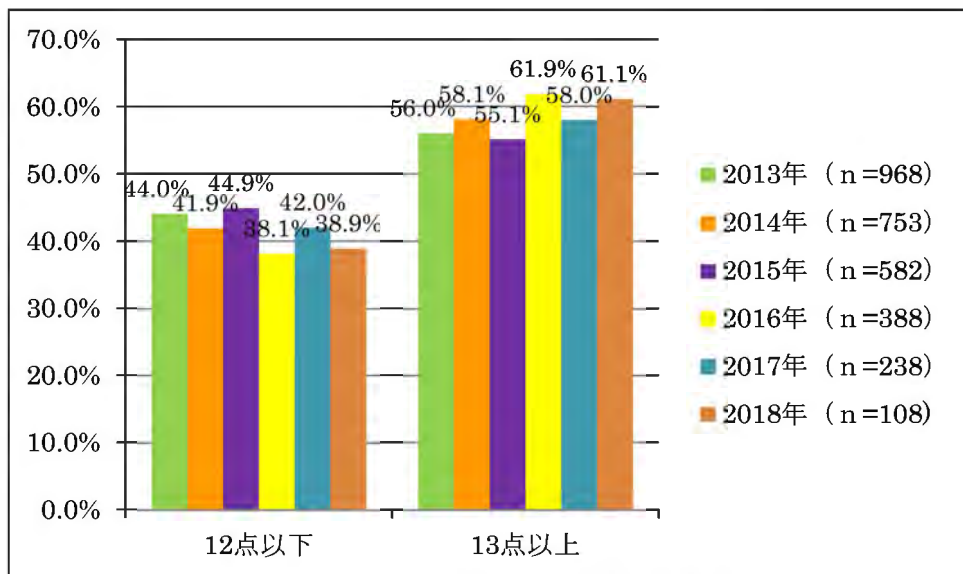


図13 WHO-5スコア

6 心の復興についての「自由回答」

心の復興に関して、自由回答でえられた内容を見ると、①さびしい気持ちについて回答されたものや、②人とのつながりについて回答されたのがみられる。心の復興と「関係の孤立」との関係がうかがえる。次に、③暮らしのことや④家のことへの回答が多い。このことから、心の復興と経済生活や生計での安心、安住の場所などとの関係が深いことがうかがえる。このほか、⑤先の見通しのことや、⑥自立して生活することなど、自己実現と安心できる方向性を志向することが、心の復興と関係するとみられる。

① さびしい気持ちについて

「復興が進むにつれさびしい気持ちになる。」「心配事が増えた。」「その時その場で気持ちの浮き沈みがあり、揺れ動く。」「サイレンの音を聞くと思い出す。」「近所の人達の引越し、移動などで、生活音がなく、不安も少し感じている。」「精神的、肉体的に疲れた。」「日中は工事をしているのでよいが一人暮らしなので夜は淋しい。特に住人が少なくなり淋しいしこわい。」

② 人とのつながりについて

「話ができる人がいて、周りも同じ環境の人だから、気持ちは落ち着いてきた。」「毎週月曜日のお茶会が楽しい。」「買い物の車が来ても2～3人で行くのが助かる。向かいの男の人の声で起きる。」「こんな状態が続いて行くのだろうか。自分の力では、仮設住宅から出るとは考えられない。」「この団地に来てから最初は泣いていた。お茶を飲んだり、話したりしているうちに、だんだんよくなった。」「いつも気持ちに余裕が無い。自分が2、3人いればいいのと思う。頼まれると断れない、そしてキャパオーバーで自分が苦しくなるのに、困った人を見ると放っておけない。」「何の為に生きているかわからなくなる時もあるが周りの人が関わって私を1人にしないのでまたやる気を出すのくり返し。」「娘が宮城県から仕事をやめ岩手に帰ってきて自宅を再建することになり、1人でなくなってうれしいです。」「孫が震災後に生まれたのでどう伝えていけばよいか。」「娘が結婚しうれしい。子供たちの迷惑にならないようになるべく自立したい。痛いと一人でやっていけるか不安。一人だと調子悪い時生きていたくないと思った。」

③ 暮らしのことについて

「変わらないが、経済的に厳しくなっている。」「年に3回の入退院（震災後）。生活面で困っていて生活保護を受けている。」「仮設から生活用品を買う為自家用車を使えない。歩いて1時間20分ほどかかる。」「町民バス当てにならない。生活保護を受けても車を移転出来るようにしてほしい！（被災者だけ）。」「酒、たばこはしていないのでまあ何とかなっている。」「自分は足が悪いので働いていない。母親の年金、妻の仕事による収入。」「現在高校3年生で働いてから進学しようと思っている。」「貯蓄」「自営業による収入もあり（はえ縄漁業、ウニをとる、漁業組合員）。」「息子さんの給料」

④ 家のことについて

「家があって住んでると明るかった。狭い家ではつまずくし、ゆったりとできない。早く住むところを決めたい。建てるのは難しい。」「家を建てるために引っ越しが面倒という問題。」「息子がいるので無理しても家を建てているがこれから先のことを考えると不安である。」「今度大きな津波が来たら不安。なぜ高台に建てない?」「工事が始まればもう少しという気持ちになる。」「鉄道がやっとできてきている。復興している面ある、ラグビー競技場できてかわってきたと思う。」「このまま仮設にいては自分の復興が出来ない。家を建てる金銭面や高い公営住宅、持家に住んでいたのに住む為の家賃が納得出来ない。」「今年こそ自分たちの住家が出来ると思っていたのに工事の遅れで来年度になりそう。」「要介護の母が亡くなり住宅も公営に申し込み少し先の見通しが見え、肩の荷が下りた気がする。元々は自力再建希望だったが、諦めたことで肩の荷が下りた。北海道に暮らす兄も了解してくれた。」「周りがどんどん出て行く状態なので、ますます寂しくなっている。区画整理の方がずっと遅れているので、復興住宅が三年以上の遅れ、ずっと伸びているので厳しくなっている。」「仮設での生活が長すぎる。」「早く仮設から出たい。なにも変わらない。」「仮設が3月から借りられなくなって落ち込んでいる。去年ははりきっていたが。住宅について去年の見通しが、昨日（役場から3月までに仮設を退去するように言われて）くずれた。」

⑤先の見通し

「先の見通しが持てない。」「年をとっている分きびしくなった。」「精神的に落ち着いてきたのですが今後の家のことを考えると不安。」「これからのこと不安（災害公営住宅へ引っ越し）。例えば隣が誰でどんな人なのか。」「うつ状態である。交通手段がないので買い物できず楽しみがない。」

⑥自立して生活する

「ケガをして歩けなくなり、ふらふらはしているが頭はしっかりしている。お風呂にも自分で入れる。」「今は趣味や楽しみがたくさんある。座っていることは少ない。」

7 生活のきびしさ：被災前と被災後

被災前のことについて、2014年から2016年の調査では聞いた。それによると、「被災前きびしかった」と答えた人は約3割に及んでいることがわかった。震災は、被災前からのきびしさと、被災による厳しさのダブルパンチを受けた人が少なくないのである。

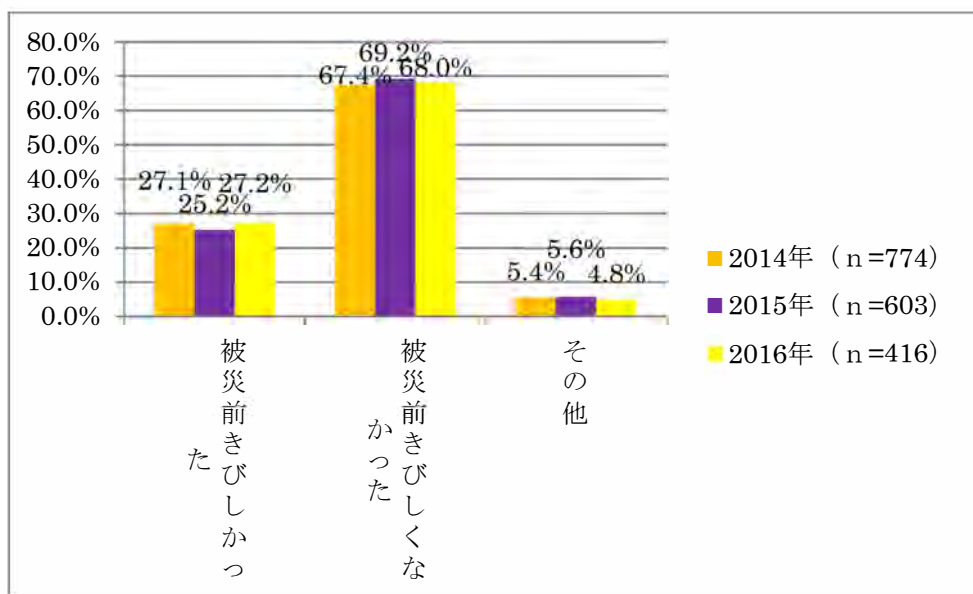


図14 被災前厳しくなかったか

被災後について、「きびしい」か「きびしくないか」をうかがったところ「被災後きびしい」と答えた人は、6割から5割に及んでいる。「被災後きびしくない」と答えた人は約三分の一である。2017年調査以後では、「その他」と答えた人の割合が高くなっている。「その他」の内訳をしてみると、厳しい内容の記述が目立っている。そうすると、「被災後きびしい」の比率は、「その他」のうち厳しい内容の比率を足し合わせてもよい回答も目立つ。「被災後きびしい」とする回答の比率は、もっと高くなる可能性がある。

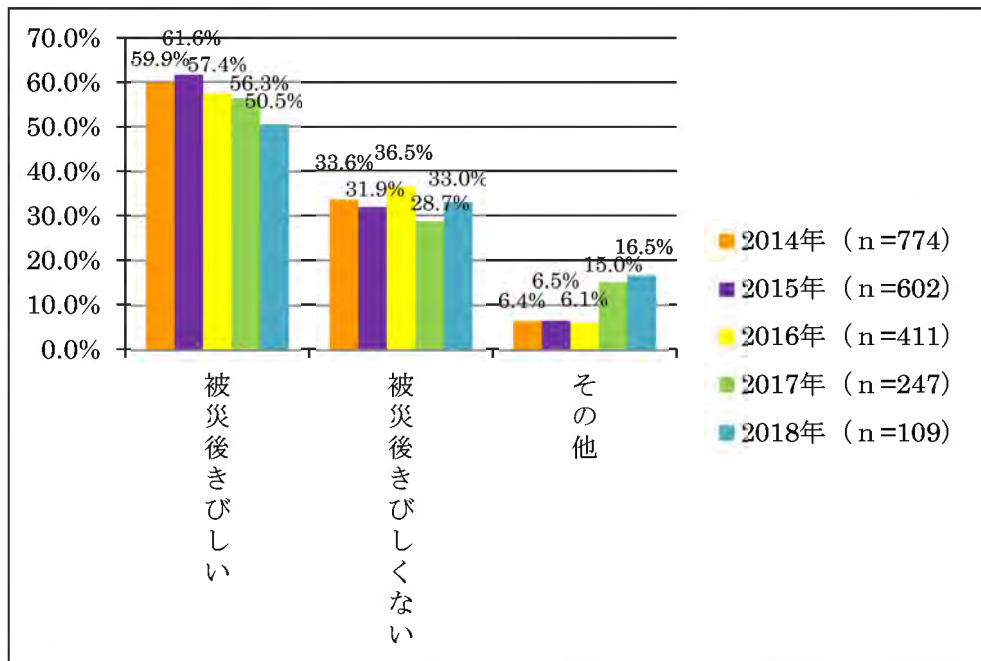


図 15 被災後厳しかったか

①きびしい

「仕事をやめるためこの先厳しくなりそう。」「自分達から年金が65才から。」「仕事がない。」「どちらかという安定していないので厳しい方かも。」「給料はあるが今後の再建に不安あり」「今は仮設なのでいいが公営住宅の家賃の負担が気になる。」「収入上がっても家賃上がる。今の生活を続けるしかない。」

②きびしくない

「ただし、今後復興需要がしばみどうなるかは心配。」「この仮設に来たときは、厳しかったが、だんだんと良くなってきた。」

③その他

「落ち着いているが仮設を出るための心の準備がない。」「今後のことが不安で、厳しいとか厳しくないとかわからない。」「2018年9月以降、寺野の方に家を建てる。9月末が入居予定だが、少し遅れるかも。少し希望になっている。」

8 交友活動、社会参加活動

交友活動などの社会参加活動をしているかどうかをうかがった質問では、「特にない」という回答が、2014年では5割を超えていたが、2018年では34.2%となり、減少している。交友活動は、以前よりも活発になったといえるかもしれない。「友人と会ったり、連絡を取り合っている」割合は、2011年は29.3%、2014年が24.3%であったものが、2018年では44.1%へと増加している。「サークル活動・勉強会などに参加している」比率も伸びつつあるようにみえるが、2割を下回っているほどであることから、社会参加による自己実現の活動が活性化する施策は依然として必要なのではないかとと思われる。「町内会や仮設のイベ

ントなどに参加している」比率は、おおむね3割程度で一定の活力はみられるものの、さらなる活性化への期待がかけられるであろう。

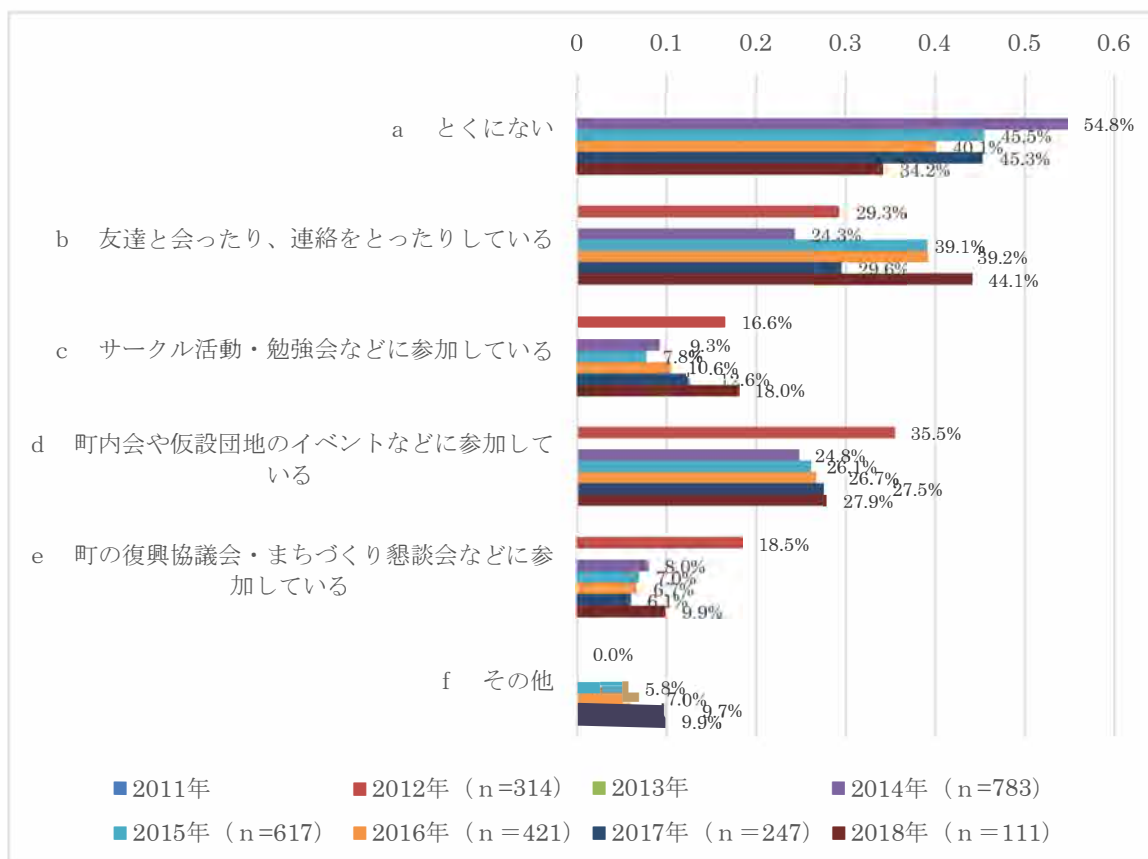


図 16 交友活動、社会参加活動

9 まち全体の復興状況

まち全体の復興状況について、5段階で尋ねた。7年間の推移をみると、最低の水準である「0～20%未満」が2011年には8割近かったが、2018年には1割を割っている。40%以上の比率の合計も徐々に増え、2018年には6割を超えている。

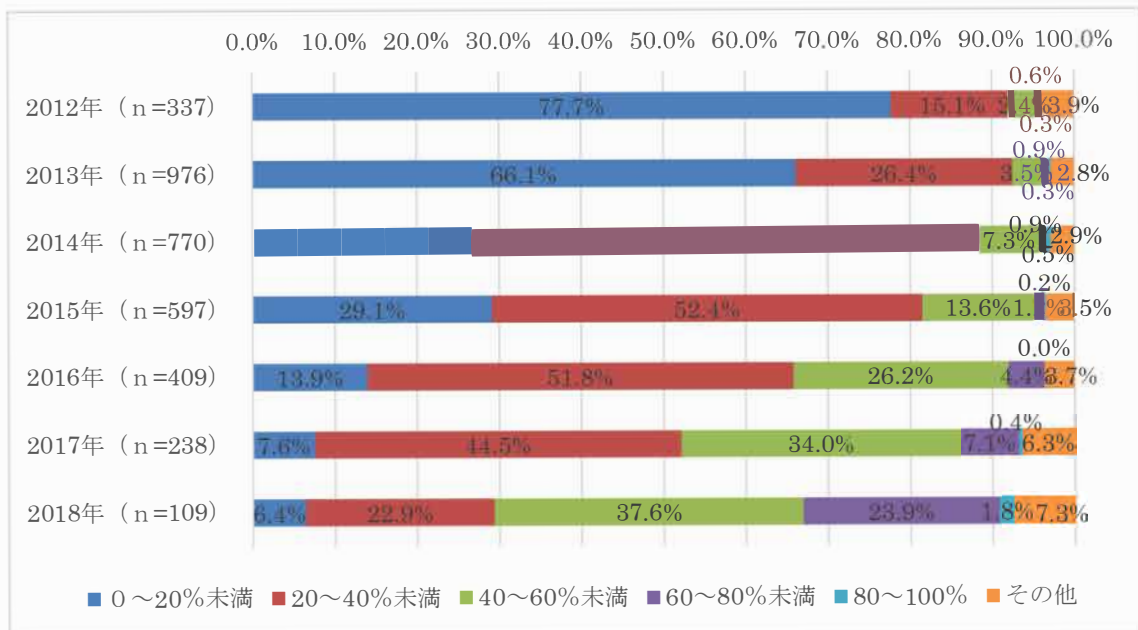


図 17 まち全体の状況

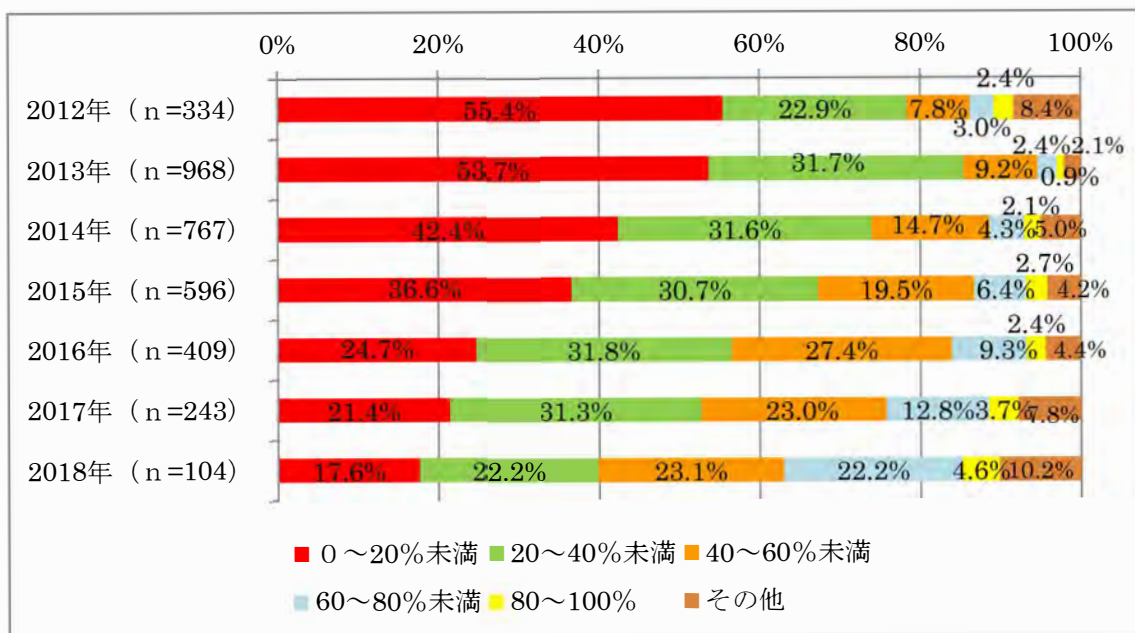


図 18 自分自身の復興状況

自分自身の復興状況では、「0～20%未満」の比率は、2012年、2013年では5割を超えていたものの、2018年には2割を下回った。その一方で、40%以上の比率は、2012年の段階では、1割強であったものが、2018年には5割を上回る結果となった。

一年いちねんと復興の度合いは高まっているといえる。しかしながら他方で、2018年調査における自分自身の復興の度合いは、まち全体の復興と度合いと比べて、分散の度合い

が高いとみられる。20%未満、40%未満、60%未満、80%未満の4つの段階のそれぞれが、20%程度の比率を示している。自分自身の復興の度合いが、いまだ依然として低い人と、かなり高いところまで到達している人との落差があるように思える。

10 大槌町の方がたの「大槌町への愛着」

大槌町への愛着の度合いを4段階で聞いたところ、2011年の調査結果においては、「強い」が48.3%、「やや強い」が34.3%となり、両者合わせて8割を超えて（82.6%）いるのである。被災者の町への愛着はかなり高いと言える。この傾向は、被災から時がたっても大きく変わることがない。2018年では、「強い」が45.7%、「やや強い」が33.3%であり、両者合わせて79.0%である。細かく見ると、たとえば「弱い」に着目すると、2011年では6.3%であったものが、2018年には12.4%へと増大している。

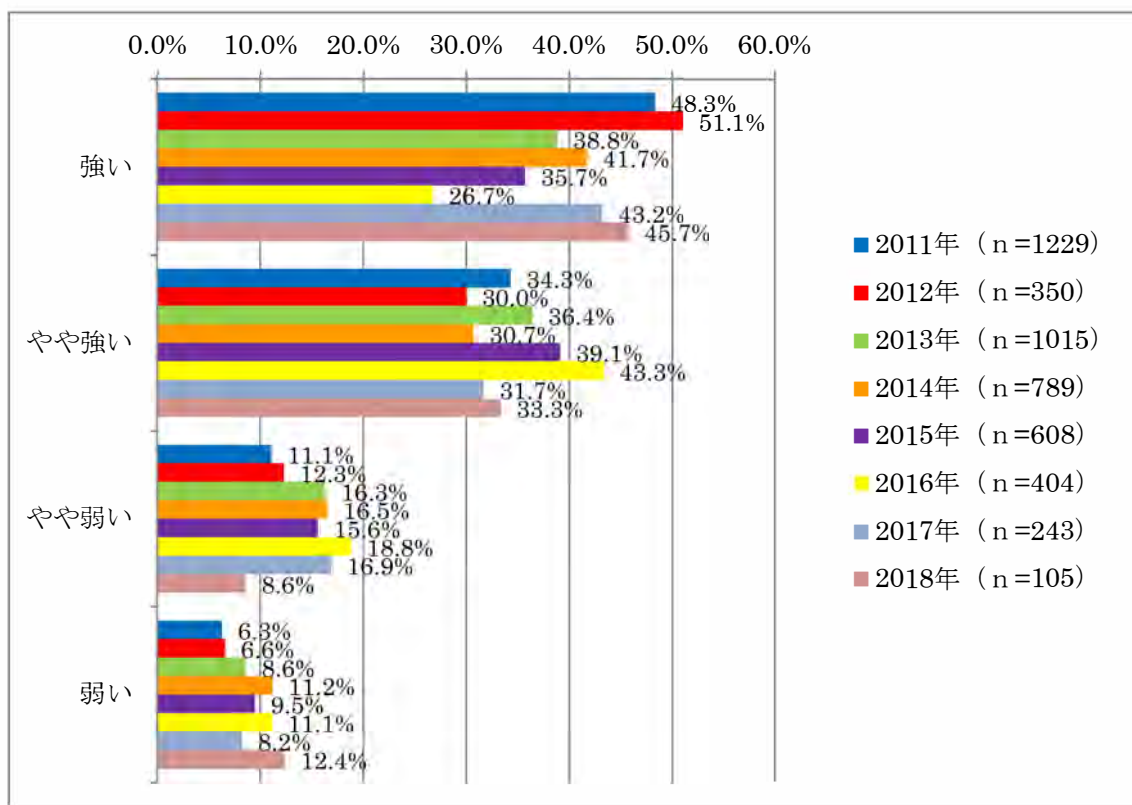


図 19 大槌町への愛着

11 3つのリスク

調査での着目点の1つは、3つのリスクの現状と推移である。3つのリスクとは、A（関係面でのリスク）、B（心の面でのリスク）、C（生計面でのリスク）である。

「関係面」では、①仮設への訪問で訪問者がなかったこと、②交友関係やイベント・行事への参加がみられなかったことの両方がいずれかが欠けていたかどうかをチェックポイ

ントとした。「心の面」では、①心の平穏で「気持ちの面でかえってきびしい」と答えたこと、②WHO-5 の調査項目の集計で 12 点以下であったことの両方か片方が該当するかどうかをチェックポイントとした。「生計面」では、現在の暮らし向きが「きびしい」と回答したかどうかをチェックポイントとした。

こうして集計してみると、3つのいずれも該当しない「リスク0（ゼロ）」が 21.1%と、約2割であった。次いで、3つのいずれか1つが該当する「リスク1（1リスク）」は、33.3%であった。また、3つのリスクのうち、2つが該当する「リスク2（2重リスク）」は、26.3%、3つのすべてが該当する「リスク3（3重リスク）」は、19.3%であった。2重リスクと3重リスクとを足し合わせた「多重リスク（2重+3重）」は、45.6%に及ぶことがわかった。

被災から8年目を迎えた被災者の生活の現状は、3つのリスクの観点からみると、まだまだ復興とは程遠い状態にある。こうした現状を踏まえた支援策の継続が望まれるのである。

表2 3つのリスクの現状（2018年調査）

リスク0(ゼロリスク)	21.1%			
リスク1(1リスク)	A(関係の面)	B(心の面)	C(生計の面)	A+B+C
	11.4%	10.5%	11.4%	33.3%
リスク2(2重リスク)	AB(関係と生計)	BC(心と生計)	AC(関係と生計)	AB+BC+AC
	8.8%	11.4%	6.1%	26.3%
リスク3(3重リスク)	A+B+C(関係と心と生計のすべての面)			
	19.3%			
多重リスク(2重+3重)	リスク2(2重)+リスク3(3重)			
	45.6%			

これを2016年仮設住宅調査や、2016年公営住宅調査と比較すると、3重リスクにおいて、19.3%（2018年調査）、20.9%（2016年公営住宅調査）、21.1%（2016年仮設住宅調査）となり、いくぶん改善しているようにもうかがえる。

2重リスクにおいては、26.3%（2018年調査）、28.1%（2016年公営住宅調査）、29.3%（2016年仮設住宅調査）となり、やはりいくぶん改善しているようにうかがえる。

また、2重リスクと3重リスクを足した「多重リスク」においては、45.6%（2018年調査）、48.9%（2016年公営住宅調査）、50.4%（2016年仮設住宅調査）となり、同様にいくぶん改善しているようにうかがえる。

しかしながら、「ゼロリスク（リスクなし）」では、21.1%（2018年調査）、21.6%（2016年公営住宅調査）、22.6%（2016年仮設住宅調査）となり、ほとんど変わっていない様子が

うかがえる。こうした現状を踏まえ、また被災者のリスクの様相が、一様ではないことにも着目した支援策の継続が必要となっている。

表3 3つのリスクの多重性(2016 公営住宅調査)

リスク類型:比率		生計	精神	関係	小計
S リスク		15.1%	3.6%	10.8%	29.5%
多重リスク	W リスク	28.1%			48.9%
	T リスク	20.9%			
NO リスク		21.6%			21.6%

表4 3つのリスクの多重性(2016 仮設住宅調査)

リスクの多重性		生計	精神	孤立	小計
S リスク		15.0%	2.3%	9.8%	27.1%
多重	W リスク	29.3%			50.4%
リスク	T リスク	21.1%			
NO リスク		22.6%			22.6%

12 借金・ローンについて

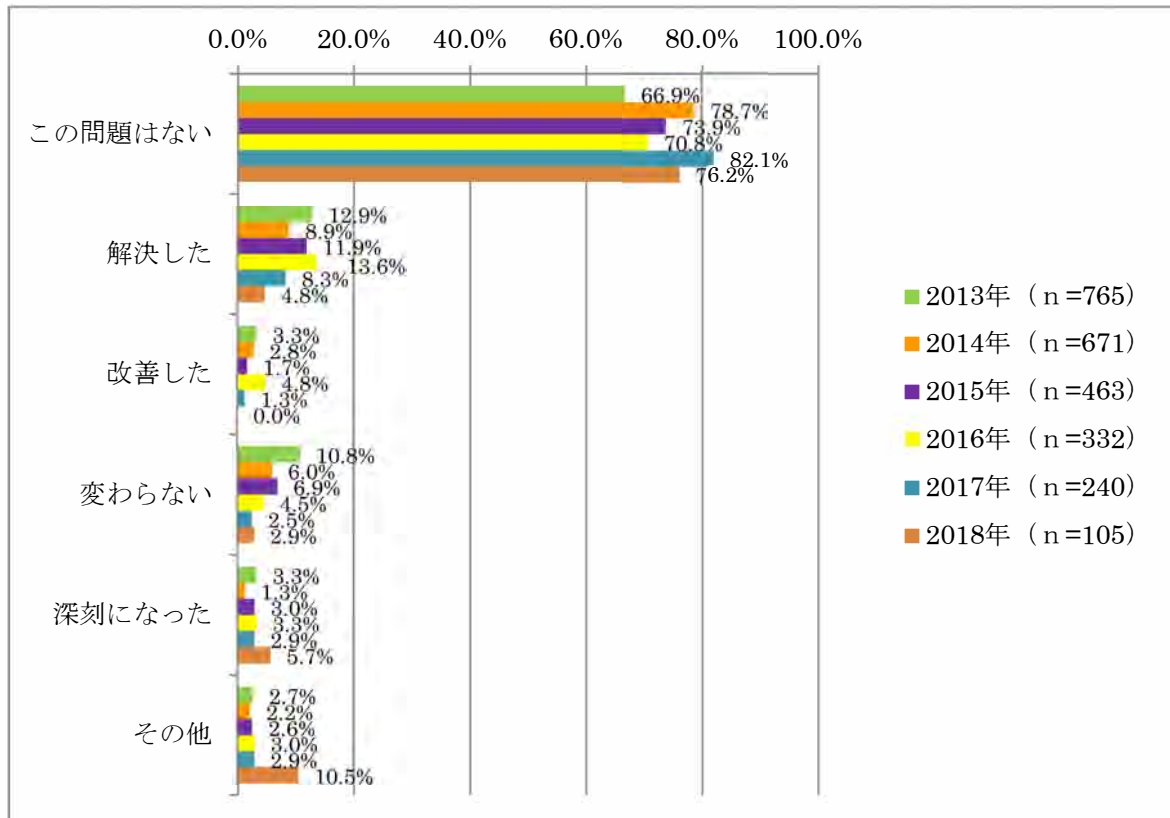


図 20 借金・ローンの有無や推移

借金・ローンの有無や推移について聞いた。「この問題はない」と答えた人の割合がしばらく多く、7割から8割へと至っている。2013年の調査では66.9%であるということは、被災から3年目は、三分の1の人が借金・ローンの問題を抱えていたということである。それに比べると問題の比率は減ってきたと言える。その一方で、2018年の調査で増加したのは、「深刻になった」と「その他」である。全体として借金の割合は減ったものの一部の層にとっては、深刻になったということである。

深刻化と答えたケースに以下のような内容があった。「貸した金が返ってこない。騙された。」(60歳代男性) お金の貸し借りは、銀行や他の金融機関ばかりでない。

被災者個々人相互でのやり取りもある。中には、返ってこない。返すに返せないというトラブルもあると想像される。善意で貸したものが返ってこないと、自分自身もそうたいした余裕もなしに貸したのに、途方にくれる人もあるのだろう。このケースは、お金を貸して、生活が深刻になった例である。こうした案件に関わり、事態の改善に向けての相談や調整ができる窓口が不可欠であろう。

借金・ローンの状況に関する質問と、3つのリスクにおける類型（リスクゼロ、1リスク、2重リスク、3重リスク）との関係性をみるために、クロス集計したところ、2018年調査のデータ数は少ないが、その中で、「深刻になった」と回答した方6人のうち、3人は、3重リスクである。3重苦の中で、そうした多面的に閉塞した中で、借金・ローン問題の深刻化の状況にある被災者について、少数とはいえ、何らかの救済策について、積極的に介入し、生活状況を改善へと導く必要を痛感する。

表5 リスク（リスクの数と借金・ローンの状況

	リスクの数				
	ゼロ	1つの リスク	2つの リスク	3つの リスク	総計
借金・ローン					
1 この問題なし	19	26	23	12	80
2 解決した		4		1	5
4 変わらない		1	1	1	3
5 深刻になった	1	2		3	6
6 その他	3	3	2	3	11
総計	23	36	26	20	105

「その他」としては、2018年は、その他への回答が増えた。その内容をみると、深刻といえるようなケースが目立つ。深刻になったの回答は徐々に減ってきたものの、深刻になったのではないけれど、新たな借金・ローン問題がでてきているとうかがえる。結局の

ところ、この問題について、全体的に収束するという方向にはないということである。1割程度、もしくはそれ以上の人は、困難を依然として、あるいは新たな困難を抱えているといえる。

借金・ローンについて、次の状況が回答された。

「母を老人ホームに入れているので生活は厳しい。」(55 歳男性)、「年とってるからローンを払うのが能力的にきつい。」(77 歳男性)、「家を建てる。」(43 歳女性)、「これから家を建てる予定」(18 歳女性)、「これから家を建てた時にローンを組む。」(78 歳女性)、「2 世代ローン」(83 歳女性)、「この点については基本的に息子がうけもっている。」(77 歳男性)、「リフォームの借金がある。」(74 歳男性)、「毎月返している。」(66 歳男性)